

# 福 田 遺 跡

近畿自動車道松原すさみ線および府道松原泉大津線建設に伴う

発掘調査報告書

1994. 9

大阪府教育委員会  
財団法人 大阪文化財センター

カラー図版1



調査区全景（南から）



B地区サヌカイト集積構造B-01検出状況（北から）

カラー図版 2



盛土内出土二重邊

## はしがき

この報告書は、大阪府教育委員会並びに財團法人大阪文化財センターが昭和61年から昭和62年まで近畿自動車道松原さみ線および府道松原泉大津線の用地内を発掘調査した成果報告です。報告書作成にかかる遺物整理は、平成5年度から平成6年度にかけて実施したものです。

発掘調査の結果、福田遺跡の立地する堺市中東部域、泉北丘陵北部の台地から谷部にかけての土地利用の変遷が判明しました。台地は標高40~50mの洪積段丘の高位面にあたり、国指定史跡の大野寺の土塔、大阪府指定史跡御坊山古墳、式内社の愛宕（火電）神社や陶荒田神社などが存在しています。これらの文化財は、南東から北西に向かって延びる尾根の上を走る西高野街道の西側の台地上に存在しています。この丘陵や台地は、縁辺部から尾根に向かう谷によって開析され、現在の集落景観も開析された台地を単位にして營まれています。

福田遺跡は、標高44~46mの台地の上の小規模な開析谷に存在し、発掘調査の結果、近世の耕作に伴う整地層が確認されました。そこでは用水路や井戸、暗渠、犁溝跡などが検出され、また整地層には多くの須恵器が含まれており、周辺の斜面に古墳時代の須恵器窯跡があった事をうかがわせました。さらに、自然流路のほとりで弥生時代か繩文時代にさかのぼるサヌカイト集積遺構も検出されました。

このように、福田遺跡では原始・古代から近世に至る、古文書などに記録されない人々の暮らしの跡が確認されました。今後とも、私たちの身近な所に保存された文化財の活用について、思いをいたしていただければ幸いでございます。最後に、調査の実施並びに報告書の作成にあたって関係各位に多大な御協力を賜りました事を記して、お礼にかえさせていただきます。

平成6年9月

大阪府教育委員会事務局  
文化財保護課長 田中 宏

## 序 文

「凡（およそ）和泉の国は、土地肥饒にして、農人等耕作に力を用ひ、五穀菜蔬をううるに精し。故に麦及菜など他国にまさりて、はなはだうるわし。田圃の内塵芥（ちりあくた）なく、畦（うね）をなすに、工匠のすみ（墨）繩を引たるが如し。凡田圃に功を用て精しき事、五畿内は他州にすぐれ、大和河内は尤（もっとも）すぐれたり。和泉は猶それにもまさるべし。諸國のつたなくおこたれる農夫に、此地のつくり物をみせまほし。」（益軒全集卷之七 112頁 益軒全集刊行部 1911）

この文は、江戸時代前期の学者貝原益軒が畿内を巡遊した時の紀行文「南遊紀行」で泉州地方の農業に関する感想を述べたものである。このように、泉州農民の精勤振りとその技術を絶賛している。益軒がこの地方を訪れたのは元禄2（1689）年の事であるが、泉州地方が既に17世紀終わり頃には商品作物の栽培を含めた高度な農業を行っていた事を示している。

17世紀は、泉州地方でも新田開発が盛行している。今回の調査の対象となった福田遺跡の所在する堺市福田も、正保3（1646）年に成立した畠作新田である。福田周辺は大野と呼ばれ、洪積世高位段丘上の高燥の地である事から長らく開発の及ばなかった地域である。そこに畠作専門の新田が開発されたという事は、泉州地域における商品作物栽培への強い意欲と高燥地での栽培技術の向上が背景に存在したのであろう。17世紀の終わりから18世紀初めには、かつては開発不能と呼ばれた大野も大半が耕地化されている。「泉州志」には福田村等の大野で煙草が栽培され、新田煙草と賞すると記されている。

この地域は、耕地としての開発は17世紀まで下るが、古墳時代には日本最大の窯業地域であった陶邑古窯址群の北側の外縁地帯に位置し、須恵器窯が点在する。今回の福田遺跡の調査でも、須恵器窯本体の検出はなかったものの、近くに少なくとも2基以上の未知の須恵器窯の存在することが明らかになっている。近年、この周辺での発掘調査で、統々と須恵器窯が新規発見されており、この地域一帯に未発見の窯跡がまだまだ多く存在すると思われる。また、出土遺物に埴輪片が混じることから、周辺に古墳かもしくは埴輪窯の存在する可能性もある。

さらに、遺跡西方約800mには奈良時代の僧行基の創建と伝えられる大野寺と土塔が存在する。特に土塔からは僧尼、豪族、一般民衆の名前が書かれた90例の瓦が出土しており、行基の幅広い宗教活動の一端を示す好資料となっている。

福田遺跡の調査は、近畿自動車道松原すさみ線および府道松原泉大津線建設に伴うものであるが、近世の開墾で削平を受けた部分が多く、遺構の検出量そのものは多くなかった。それでもサヌカイト集積遺構、須恵器窯に関連する多量の遺物、中世の自然流路、近世の井戸や犁溝等の農耕関連遺構が検出されており、ともすれば見過ごされやすい高位段丘上の遺構分布を考える上で貴重な成果を得ている。

これも、偏に大阪府教育委員会、大阪府土木部、日本道路公団を始めとする関係各位のご指導、ご協力の賜物と感謝している。今後とも当センターへのご支援を賜るよう切に希望する。

平成6年9月

財団法人 大阪文化財センター

理 事 長 坪 井 清 足

## 例 言

1. 本書は、近畿自動車道松原すさみ線および都市計画道路松原泉大津線建設に伴う福田遺跡発掘調査の遺物整理事業に伴う本報告書である。
2. 整理事業は、大阪府教育委員会および財団法人大阪文化財センターが大阪府土木部鳳土木事務所と日本道路公団大阪建設局の委託を受けて実施した。
3. 本整理事業に要した費用は、すべて大阪府土木部鳳土木事務所と日本道路公団大阪建設局が負担した。
4. 本遺物整理事業は、大阪府教育委員会の指導の下、財団法人大阪文化財センターが1994年1月より1994年9月まで実施した。
5. 本遺物整理事業の主な関係者は以下の通りである。

調査課課長 中西靖人（統括）  
主幹兼調査課第3係長 赤木克視（整理・報告書作成）  
調査課第3係主任技師 平井貞子（写真）

6. 遺物整理にあたっては、下記の調査補助員の協力を得た。  
内山信子・西田久美・松本昭子・宮川和幸・山本順治・吉川長太
7. 須恵器・埴輪の胎土分析を（株）第四紀地質研究所 井上巖氏に委託した。紙数の関係上、分析表しか掲載できなかったが、詳細な分析データを必要とする方は当センターに連絡頂ければ提供する。
8. 本書の執筆分担は、下記の通りである。  
赤木克視 第1・2章、第3章第1・2・4節、第4章  
三好孝一 第3章第3節
9. なお、本書作成にあたっては、挿図作成に上河善子・中村慎子、遺物復元に川田嘉代子・中筋英子、文献の検索に長尾恵、近世陶磁器等の類別に坪田恵の協力を得た。  
また、大阪市立大学助教授 村田正博氏には稀覯本の検索・閲覧、堺市教育委員会 森村健一氏には近世陶磁器等の産地同定、時期判別に労を賜った。記して感謝の意を表する。
10. 本書の編集は、赤木が行った。

## 凡 例

1. 福田遺跡の略称は、F K Dである。
2. 方位は座標北、レベルは東京湾平均海水位（T.P.）である。
3. 測量基準線は、国土座標の第VI座標系を使用している。
4. 遺構番号については、現地調査段階で付与したものを原則としてそのまま使用している。ただ、A地区とB・C地区との区別を付けるために、それぞれの遺構番号の前に地区名を付けている。
5. 遺物実測図における断面は、須恵器を黒ぬり、土師器・陶磁器を白ぬき、瓦器をスクリーントーンNo.81（アミ）、瓦をスクリーントーンNo.1019（斜線）で表している。

# 目 次

カラー図版

目次・例言

第1章	はじめに .....	1
第2章	地理・歴史的環境 .....	3
第1節	地理的環境 .....	3
第2節	歴史的環境 .....	5
第3章	調査の成果 .....	6
第1節	層序 .....	6
第2節	遺構 .....	7
第3節	遺物 .....	12
第4節	自然科学的分析 .....	25
第4章	まとめ .....	27

## 卷頭カラー図版目次

カラー図版1 〈上〉 調査区全景

〈下〉 B地区サヌカイト集積遺構B-01検出状況

カラー図版2 盛土内出土二重壁

## 挿 図 目 次

図1 遺跡位置図 .....	1	図10 溝A-39出土遺物(2) .....	16
図2 トレンチ配置図 .....	2	図11 溝出土遺物(1) .....	17
図3 大阪盆地南部地域の地質概略図 .....	3	図12 溝出土遺物(2) .....	18
図4 周辺の遺跡 .....	4	図13 落込・土坑・井戸出土遺物 .....	19
図5 層序模式図 .....	6	図14 盛土内出土遺物(1)須恵器 .....	20
図6 サヌカイト集積遺構B-01平面・断面図 .....	8	図15 盛土内出土遺物(2)須恵器等 .....	21
図7 遺構平面図 .....	9~10	図16 盛土内出土遺物(3)須恵器等 .....	22
図8 溝B-201・B-202土層断面図 .....	11	図17 盛土内出土遺物(4)須恵器 .....	23
図9 溝A-39出土遺物(1) .....	15	図18 盛土内出土遺物(5)埴輪 .....	24

## 表 目 次

表1 増輪・須恵器胎土性状表 .....	25	表3 報告書抄録 .....	28
表2 増輪・須恵器胎土化学分析表 .....	26		

## 写 真 図 版 目 次

図版1 空中写真 〈左〉	1 A トレンチ 〈右〉	3 A トレンチ
図版2 空中写真 〈左〉	2 A トレンチ 〈右〉	B・C地区
図版3 遺構検出状況 〈上〉	A地区第二遺構面 〈下〉	B地区第一b遺構面
図版4 遺構検出状況 〈上左〉	B地区井戸 〈上右〉	A地区溝A-39遺物検出状況
〈中〉 B地区溝B-202土層断面 〈左・下右〉		B地区サヌカイト集積遺構B-01
図版5 溝A-39出土遺物		図版8 盛土内出土遺物(須恵器)
図版6 溝出土遺物		図版9 盛土内出土遺物(埴輪)
図版7 井戸・落込出土遺物		図版10 出土石器

## 付 図 目 次

付図1 遺構全体図(第一a遺構面)

# 第1章 はじめに

近畿自動車道松原すさみ線（旧松原海南線）および都市計画道路（府道）松原泉大津線は、美原町丹上から堺市平井まで併設され、中央に高架方式の高速道路、両側に平面方式の府道が建設される計画であった。この路線内の埋蔵文化財については、1974年度に当センターによる予備的な分布調査、1977年度に大阪府教育委員会による分布調査が実施され、多くの遺跡の存在が確認された。本書で報告する堺市福田に所在する福田遺跡も、この時の分布調査で発見されている。分布調査の結果を受けて関係機関の間で協議が進められ、出来るだけ遺跡を避けるとともに、やむを得ず路線内にかかる遺跡については遺跡範囲、遺構面の埋没深度を確認するための第1次調査を実施し、大阪府教育委員会が調査の必要を認めた個所については引き続き本調査を実施することで合意した。また、これらの一連の調査を当センターが担当することも決定した。そこで、1981年12月に大阪府教育委員会、大阪府土木部、日本道路公団、当センターの間で基本協定が締結され、本格的に調査が開始された。

福田遺跡については、1981年度末に当センターにより第1次調査が実施され、市道大野芝辻之線から西へ約240mが調査の必要な個所とされた。調査範囲の確定により、本来なら引き続き本調査に移行する予定であったが、諸般の事情により本調査の着手が遅れ、遺跡東半部を対象とした第1調査区の現地調査<sup>1)</sup>が1986年11月24日から1987年3月25日まで、西半部の第2調査区の現地調査が<sup>2)</sup>1987年5月28日より10月15日まで実施された。



図1 遺跡位置図

併設区間の調査は、3段階調査方式が採用されている。この方式は、まず第1次調査として路線の両側端にあたる府道の歩道部分幅5mを本調査の対象となる第1遺構面もしくは包含層上面まで機械掘削し、その分布を確認する。大阪府教育委員会がその結果をもとに本調査の必要範囲を決定し、第2次調査として片側約20mの府道部分上下線を全面発掘する。そこで確認された遺構・遺物の分布をもとに大阪府教育委員会と日本道路公団で協議し、保存すべき個所を避けて高速道路の橋脚位置を決定する。第3次調査は、幅約20mの高速道路内の遺構が確実に破壊される橋脚基礎部とそれ以外の調査が特に必要と認められる部分を対象として実施する。このため、高速道路内には、保存措置を講じた個所を含めて未調査部分が残る事になる。このような複雑な調査方式が採用されたのは、過去の経験から全面調査を基本とする府道と、いわゆる「2段階調査方式<sup>3)</sup>」を採用してきた近畿自動車道天理吹田線との折衷が図られたためである。なお、福田遺跡の調査では、保存措置を取られた遺構は存在しない。

併設区間の遺物整理事業については、1989年度から小阪遺跡を手始めに開始されている。併設区間の整理方針は、複数の遺跡をまとめて時期毎に整理する近畿自動車道天理吹田線とは異なり、遺跡単位で行う事になっている。これは、併設区間の遺跡が、それぞれ独立性が高い事と、同一遺構面で複数時期の遺構が検出されるため遺構を時期別に完全に分離する事が困難なためである。

福田遺跡の遺物整理及び本報告作成作業は、1993年12月27日に委託契約が締結され、翌1994年1月4日より3月31日までと同4月1日から9月30日までの期間実施された。

#### 注

- 1) 「福田遺跡（その1）」 1987 大阪府教育委員会・（財）大阪文化財センター  
現地調査担当 大栗康宏・入江正則・三好孝一
- 2) 「福田遺跡（その2）」 1987 大阪府教育委員会・（財）大阪文化財センター  
現地調査担当 三好孝一・清水 鑑
- 3) 2段階調査方式とは、第1次調査として高速道路の幅約30mの中央10mをまず調査し、遺構・遺物の分布を確認する。その結果を受けて保存すべき個所を避けて橋脚位置を決め、第2次調査として橋脚基礎部を調査するというものである。

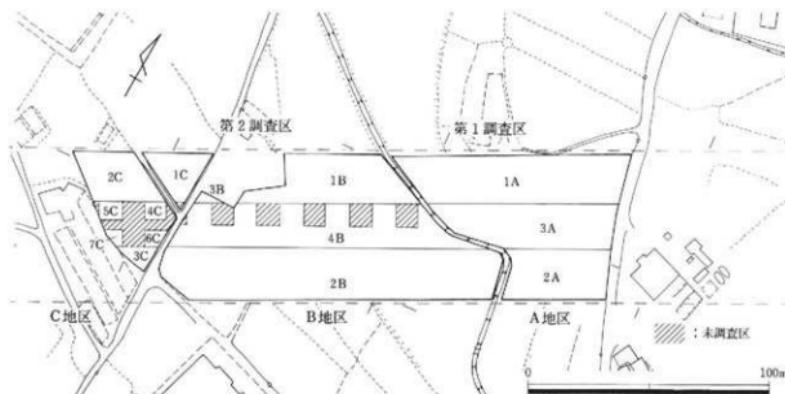


図2 トレンチ配置図

## 第2章 地理・歴史的環境

### 第1節 地理的環境

泉州地域は、南に東西に延びる和泉山脈が存在する。領家花崗岩類等を基盤岩とする和泉山脈の北麓には主として大阪層群で構成される丘陵が広がり、北や北西流する河川に開析されて小丘陵に分割されている。こうした丘陵の前縁部には段丘が発達しており、高位面、中位面、低位面が存在する。海岸部および河川沿いには沖積層が堆積している。こうした地形は、北部ほど大きく発達しており、横尾川から西除川上流の天野川に囲まれた泉北丘陵とその北に広がる高位・中位面は最大の広がりを示す。

福田遺跡は、泉北丘陵前縁に広がる高位段丘面上に立地する。泉州地域の高位段丘の堆積層は、和泉市信太山で典型的に見られる事から信太山疊層と呼ばれており、砂疊層を主とする層厚10~数mの河成層である。砂疊層を構成する疊は、砂岩、礫岩、チャート、花崗岩類、流紋岩類の中へ大疊からなっている。この最上部にはシルト層が発達している場合が多く、風化を受けて赤色土壌化している。

段丘面は、侵食を受けて大小様々な規模の開析谷が存在し、その開析谷を利用して多くの溜池が造られている。福田遺跡中央部にも北西に開く比高差2~3mの開析谷があり、下流側に柏原池等が造られている。なお、福田遺跡の標高は、約T.P.+44~47mである。

#### 参考文献

「大阪層群」 1993 市原 実 創元社

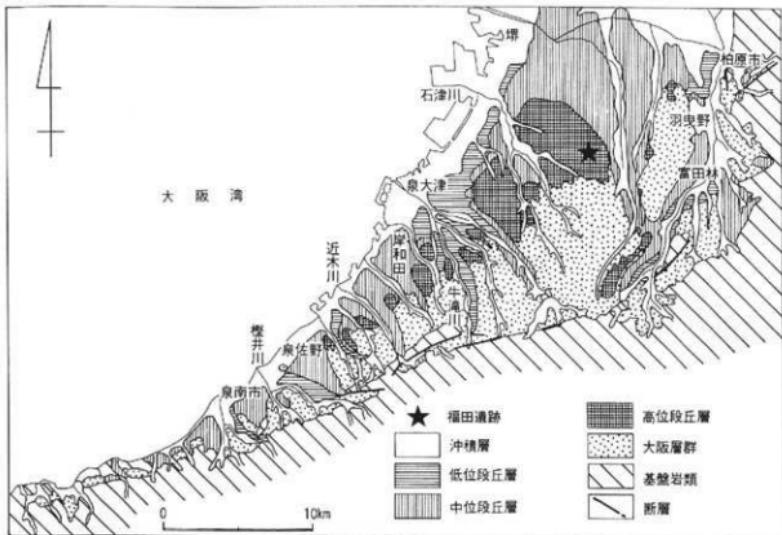
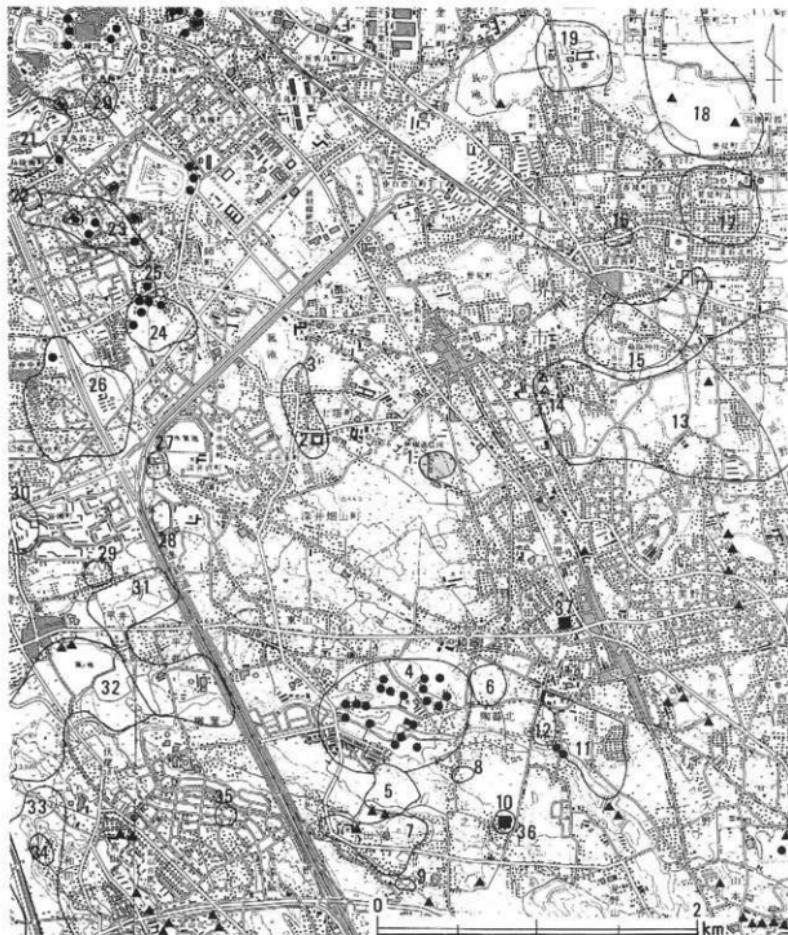


図3 大阪盆地南部地域の地質概略図 「大阪層群」市原(1993) 図5.1引用（一部改変）



- |              |                |            |              |             |
|--------------|----------------|------------|--------------|-------------|
| 1. 福田遺跡      | 2. 大野寺土塔       | 3. 大野寺跡    | 4. 陶器千塚      | 5. 辻之遺跡     |
| 6. 陶器遺跡      | 7. 田園遺跡        | 8. 上之道跡    | 9. 田園城跡      | 10. 陶荒田神社遺跡 |
| 11. 小角田遺跡    | 12. 陶器城跡（北村砦跡） | 13. 日置在遺跡  | 14. 日置莊西町窯跡群 | 15. 日置莊西町遺跡 |
| 16. 初芝遺跡     | 17. 日置在北町遺跡    | 18. 石原町遺跡  | 19. 金岡遺跡     | 20. 百舌鳥梅町遺跡 |
| 21. 百舌鳥陵南遺跡  | 22. 百舌鳥陵南庵寺    | 23. 土師遺跡   | 24. 土師南遺跡    | 25. 土師觀音衛寺  |
| 26. 深井清水町A遺跡 | 27. 深井清水町B遺跡   | 28. 深井幡ぬ道跡 | 29. 東八田遺跡    | 30. 堀上町遺跡   |
| 31. 平井遺跡     | 32. 小阪遺跡       | 33. 伏尾遺跡   | 34. 小代古墳群    | 35. 深阪遺跡    |
| 36. 式内陶荒田神社  | 37. 式内愛宕（火電）神社 |            |              |             |

図4 周辺の遺跡 「大阪府文化財分布図」大阪府教育委員会(1986) 一部改変

## 第2節 歴史的環境

福田遺跡の所在する堺市福田は、江戸時代の正保3(1646)年に成立した新田<sup>1)</sup>で、福田村と呼ばれた。福田村周辺の高位段丘面は大野や大野原あるいは大野ヶ芝などと呼ばれ、西高野街道を国境とする河内と和泉の境界線上に広がる原野であった。「泉州志<sup>2)</sup>」には、この大野についての記載の中に“俗に廣漠の地を大野と稱す”とあえて入れているほどで、用水の得られない土地柄から、薪燃料、刈穀(草を田に敷き込む)肥料、牛馬の飼料採集地として利用される入会山であった。

大野原の新田開発は、用水を溜池や井戸に頼らざるを得ないため、当初より商品作物の畠作を前提として始められたものである。開発は、和泉側から始まっている。福田では、正保以前に一部開発に着手されたが成功せず、当地を領有する陶器藩2代藩主小出有棟が家督を継いだ寛永19(1642)年以降福岡屋次郎兵衛に命じて行わせたもので、正保元(1644)年に着手し、正保3年に完了している。いわゆる町人諸負新田の先駆けをなすもので、この開発により陶器藩3000石に新たに800余石が加わる事になった。福田村という村名は、福岡屋に由来するようである。

17世紀後半には、土師新田・畑山新田・土塔新田と次々に新田が開発され、和泉側の大野原はほぼ開発し尽くされる。河内側の大野原の開発はそれより遅れ、17世紀末から18世紀初頭の元禄年間に集中する。丈六新田は元禄2(1689)年に開発したと伝えられているが、他の関茶屋新田・草尾新田・西野新田等は元禄12(1699)年に開発に着手しており、同15(1702)年に検地を受けている。

これらの新田で栽培された作物は、大坂や堺などの都市住民への販売を目的とした綿・大豆・煙草・大根・蕎麦等であった。特に煙草は、「泉州志<sup>3)</sup>」に“陶器蜂田の北皆大野なり。近世漸く田畠と為る。府久田村等數村大野の内に有り。新村なり。地煙草を生す。世に賞する和泉新田煙草是なり”と記され、当地の特産品となっていた。泉州煙草は、特に京都で知られていた。

福田遺跡の立地する高位段丘面には樹枝状に多くの開析谷が刻まれているが、そうした開析谷の斜面には須恵器窯が築かれている。これらの須恵器窯は、5世紀初めに操業を開始した陶邑古窯址群の中の東端の陶器山地区に属するもので、その北縁部に位置している。北縁部で現在の所確認されている窯跡は、深井畠山窯跡群や日置莊西町窯跡群等で、数はそれほど多くない。しかしながら、今回の併設区間の一連の調査でも、日置莊遺跡で窯本体2基、小阪遺跡で灰原1カ所が検出されている他、福田遺跡のように出土遺物から近くに須恵器窯の存在が推測できるものも幾つかあり、それらからしてもこの地域に未発見の多數の須恵器窯が存在するものと思われる。

また、日置莊西町窯跡群では、堺市と当センターの調査でそれぞれ6世紀代の埴輪窯と灰原が検出されている<sup>4)</sup>。大阪府下で検出されている埴輪窯は、多数の古墳に膨大な数の埴輪が樹立されているにも関わらず倒壊的に少ない。百舌鳥古墳群についてても、百舌鳥梅町窯跡で埴輪も焼成されたと考えられる窯跡が1基検出されているだけである。その意味で、日置莊西町で焼成された埴輪がどの古墳に使用されたかは今の所不明であるが、数少ない埴輪窯の検出例として貴重な存在である。

注

- 1) 「堺市史続編第1巻」1971 堀市役所731~746頁 以下の記述も多くは同書を参考にしている。
- 2) 石橋直之「泉州志」1700〔「五畿内志・泉州志第2巻」〕『第日本地誌体系35』1971 長坂一雄・雄山閣】358頁 原文漢文
- 3) 2) に同じ
- 4) 「大阪の埴輪窯」 1989 (財) 大阪文化財センター

## 第3章 調査の成果

### 第1節 層序

福田遺跡は、高位段丘面の北西に開く比高差2~3mの深い開析谷が入る地形上に立地している。高位段丘面上には、段丘疊層である赤褐色系の砂疊層の上に一部赤黄色粘土や黄色粘土の床土が薄くのる他は層厚20~30cmの現耕作土である暗灰色砂質土が直接覆っている。そのため、旧地形が近世の新田開発時に削平を受けていると考えられる。この近世以降の遺構のある段丘疊層上面を第一遺構面とする。なお、2Bトレンチ南西部では、赤色砂疊の段丘疊層の上にその二次堆積層であるやや濁った同色の砂疊層が薄く被っており、その中から時期は不詳であるがサヌカイトの剝片がまとまって出土している。

開析谷底部には、層厚は不明であるが段丘疊層の二次堆積層が存在する。この堆積層は、谷底を流れる河川の累積により形成されたもので、遺物が含まれないため時期を特定できない。一応、地山として扱っている。この上面が第二遺構面で、1A・3Aトレンチの最低部でのみ6世紀代の遺物を含む中世の溝や土坑等が検出されている。第2調査区の2Bトレンチ東端部ではこの上面に黄灰色系の砂質土が覆い、その上面で中世の自然流路が2条検出されている。この流路が第1調査区では上層の近世の遺構と同一面で検出されている事から、一応この面を第一b遺構面とする。2Bトレンチ東端部ではこの上面に淡茶灰色系の砂質土層が覆うが、この上面が谷部全域及び高位段丘面上で検出される遺構面と同一面と考えられるため、第一a遺構面とする。この上部には、近世の新田開発に伴ってなされたと考えられる灰褐色系の整地層が何枚にもわたって存在する。段々畠を造成する際の残土を敷きならして耕地にしたものであろうが、幾度も整地されたようすで厚い所では80cmほどにもなる。整地層の中には近世の遺物が含まれる。整地層の上には新旧2枚の床土と耕土が存在し、近世以降の遺物が含まれる。

なお、調査区内には各所に現代の盛土が存在するが、中でも南西部には1981年度末の第1次調査以降に搬入された最大層厚1mにも及ぶ盛土があり、その中に多量の須恵器や埴輪等が含まれていた。

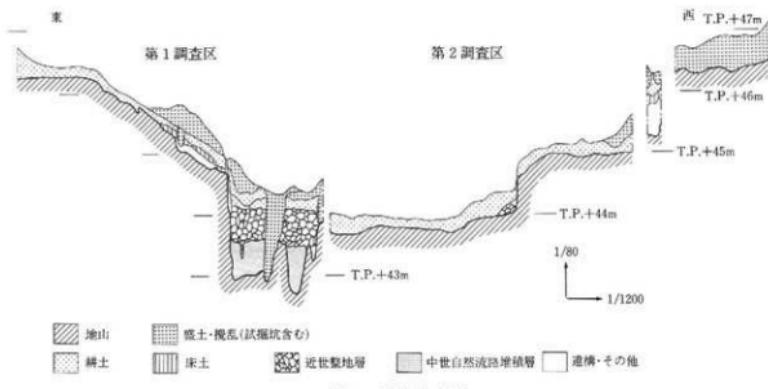


図5 層序模式図

## 第2節 遺構

### 1. 段丘疊層直上の遺構

地山である段丘疊層直上の遺構としては、第一遺構面としている主に近世以降の農耕関連遺構が存在する。本項で述べるサヌカイト集積遺構は、同じ地山直上の遺構であるが、それらとは全く時代が異なるため別個に報告する。

#### サヌカイト集積遺構 B-01(カラー図版1・図6・図版4,10)

2Bトレンチ南西部で検出されたサヌカイトの集積遺構で、剝片が100点以上出土している。剝片が集中しているのは数10cmの狭い範囲であるが、周辺にも剝片が散乱している。出土した土層は、地山の赤色砂疊層とはやや薄った色調程度でほとんど区別できない同質・同色の土層で、段丘疊層の二次堆積土として間違いないものと思われる。サヌカイト集中区周辺を精査したが遺構掘方を検出できず、二次堆積層の堆積過程の中に一括投棄されたもののようにある。

製品は存在せず、剝片のみである。精査すれば接合資料の見つかる可能性もあるが、今の所接合資料は見つかっていない。瀬戸内技法的な横長剝片も無きにしも非ずだが、全体としては特徴的な剝片製作技法が見られず、時期を特定できない。取り敢えず、石器が使用された旧石器から弥生時代までの範囲としか言いようがない。

### 2. 第二遺構面の遺構(図7・図版3)

第二遺構面とするものは、開析谷底部にある段丘疊層の二次堆積層上面である。この面で遺構が検出されたのは第1調査区の1A・3Aトレンチ西端部のみで、溝・土坑・落込が各々1つ存在する。いずれも不整形なもので、遺物が出土したのは溝 A-101のみである。溝 A-101は、幅2~4m、深さが0.5~1mと不整形で、溝としているのが開析谷底を流れる自然流路であろう。遺物は6世紀代の須恵器と14世紀代の瓦器が出土している。土坑や落込も深さが0.2~0.3m程度と浅く、性格は不明である。溝 A-101の瓦器から、この遺構面の時期は中世の14世紀代を前後するものと考えられる。

### 3. 第一b遺構面の遺構(図7,8・図版3,4)

この遺構面も第2調査区の2Bトレンチ東端部でのみ検出されたもので、第1調査区では第一a遺構面と同一面となっている。この面で検出された遺構は開析谷底の溝2本であるが、これも自然流路と考えられる。流路は切りあっており、溝 B-202が古く、溝 B-201が新しい。溝 B-202は、第1調査区の溝 A-39に連続する。

溝 B-202・A-39は、南から北へ緩やかに蛇行しており、幅1~5m、平均深度0.6mで、断面はおおむね鉢状である。流路内の埋没土は灰黄色系の粗砂や炭化物の互層であり、断面観察から數回流れを変えていることが分かる。流路内には瓦器等の中世の遺物が含まれるが、炭化物層には6世紀代の完形品を含む須恵器や窯体片が多く含まれている。この事から、流路の上流側に須恵器窯とその灰原が存在すると思われる。この溝の時期を示すと思われる瓦器が小片のため断定はできないが、14世紀の南北朝期と推定され、第二遺構面とそれほど時期を隔ててはいないようである。

溝 B-201は、溝 B-202と同じく南から北に緩やかに蛇行しており、途中でそれと合流しているが、溝 B-202よりは新しい。幅約0.6m、深さ0.6mで、埋没土は淡い灰黄色系の土だけであり、古墳時代後期から奈良時代にかけての須恵器、中世後半の瓦器等が出土している。この遺構の時期は、瓦器から14世紀後半に位置付けられる。

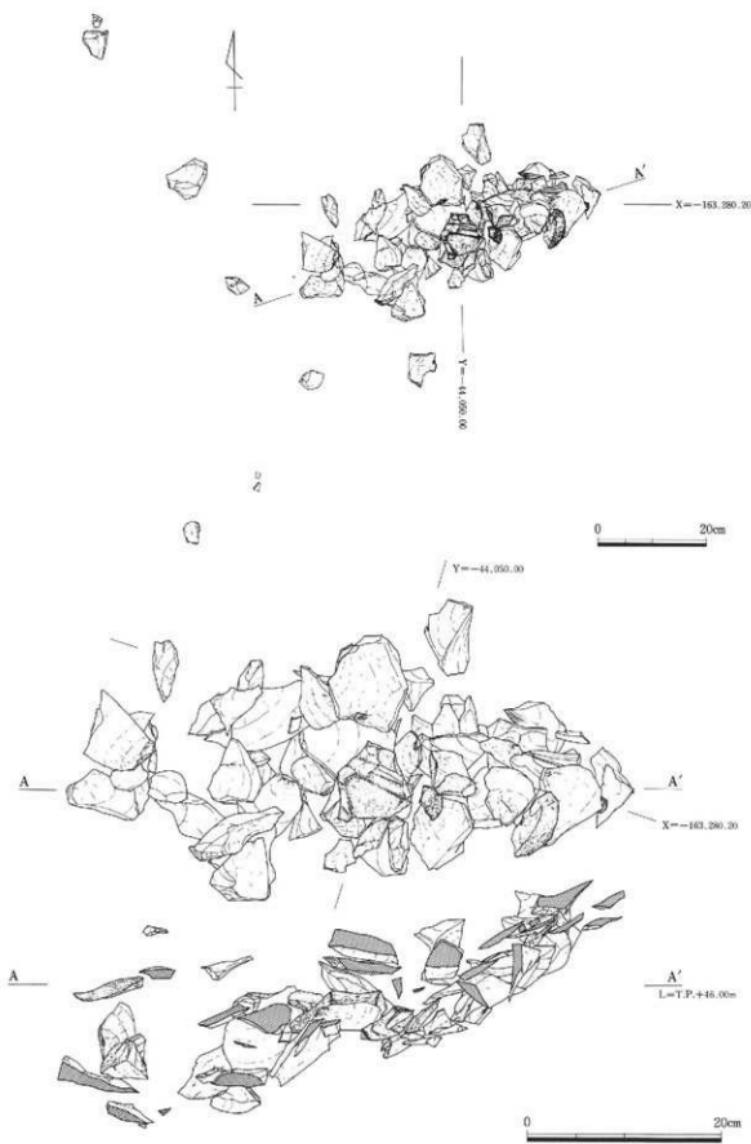


図6 サヌカイト集積構造 B-01平面・断面図

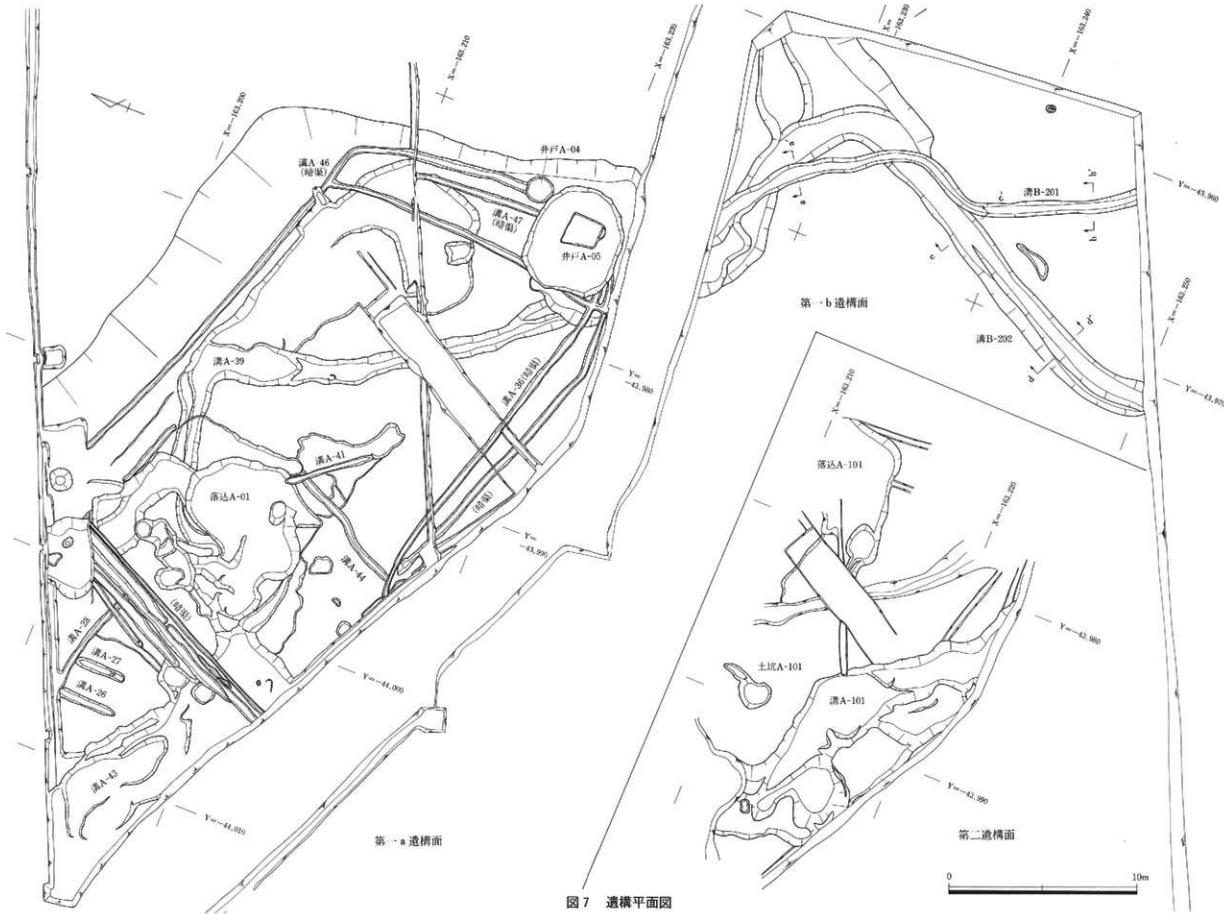


图7 造構平面图

#### 4. 第一a 遺構面の遺構（付図1・図7・図版1, 2, 4）

この遺構面で検出された遺構は、サヌカイト集積遺構と第一b 遺構面と共に通する遺構を除けば17世紀半ばの新田開発以降の耕作に関連するものが大半である。井戸、溝、土坑、焼土坑、円形土坑、円形小穴、落込等が検出されているが、遺構の切り込み面が床土より上層にあるものがほとんどを占める。

井戸は、今回の調査範囲内で今まで使用されているものを含めて15基検出されている。福田遺跡周辺一帯は、新田開発時には島作新田として開かれており、その用水は溜池か井戸によっていた。そのため、井戸の密度が高いのも当然であるが、福田遺跡（その1）の概報の中でこの付近での豊富な湧水が得られるとの地元の人の話を紹介しており、そうした事が井戸の数の多さに関係しているのかも知れない。井戸の穿たれた位置は、畦の交点や畦畔近くのものが多く、耕作の障害とならない配慮がされているようである。井戸枠の有無については、現状では素掘りのものが多く、一部木枠のものがある。

溝は、調査区全域で多数検出されているが、機能的に用水路、石詰暗渠、犁溝等に分けられる。

用水路は、現代まで継続して使用されているものについては機械掘削時に消失しているため、遺構として検出されたものは少ない。1例を挙げれば、溝B-02はB地区の上部テラス面の用水路である。

石詰暗渠は、拳大の石を幅0.3~0.6m、深さ0.2~0.5m前後の溝にぎっしり詰めたもので、その上に覆土して耕作面としている。溝A-36・46・47等、開析谷部分でのみ8条ほど検出されており、高燥の地とは言え、開析谷底では谷の上流より流下してくる水や段丘上より溢水してくる水で時に過湿潤になるための排水用の工夫と思われる。

犁溝は、いわゆる耕溝や畠溝とも呼ばれる多数の平行する小溝群であるが、ここでは犁（唐鋤）を使った牛耕時に深く耕された部分が検出されたものと考え、あえて犁溝という用語を使用している。

これらの多数検出された溝の中には、古墳時代や中世、近世等の遺物を出土するものがある。

土坑は、A地区とB地区で井戸の集中部分を中心に検出されている。直徑0.8m、深さ1.0mの土坑B-01のようなものから、落込状の浅いものまで形態は様々で、水溜の機能等があったのであろう。

落込は、A地区とC地区で1カ所ずつ検出されている。C地区的落込C-01は、里道沿いに検出された溝状の遺構で、幅5.6m以上、深さ0.7mで、両端とも調査区外へ延びている大規模なものである。

焼土坑は、B地区で3基検出されている。長径が0.8~1.0m、深さが0.2m以下のもので、埋土に炭・灰の薄層が入るものと、壁面が固く焼き縮まったものの2種がある。

円形土坑群と円形小穴群は、A~C地区で検出されているが、果樹や庭木の栽培等に伴って規則的に形成されたもので、現代のものであろう。

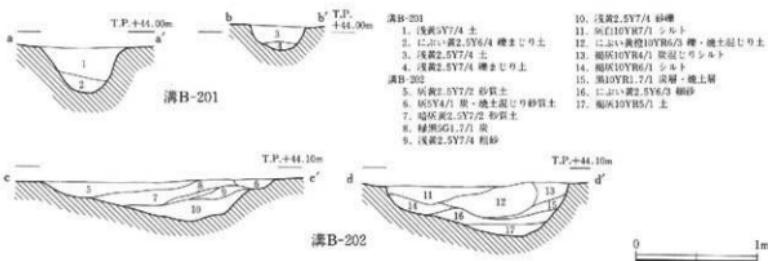


図8 溝B-201・B-202土層断面図

### 第3節 遺物

出土遺物には繩紋時代の石鏃から近代の磁器までがみられる。しかしながら、大多数の遺物は、盛土をはじめとした二次的な堆積土内より出土したものであり、示準的出土状況を示すものは自然流路から出土した瓦器などの微量の遺物のみにすぎない。以下、遺構ごとの出土遺物について説明を加えたい。

溝A-28（図11-1） 唐津焼の鉢（1）が出土している。内面に波状の白泥を塗り付けた刷毛目唐津であり、17世紀前半に属するものと考えられる。

溝A-39（図9-1～31、図10-1～11） 出土遺物には完形品を含む古墳時代後期の須恵器が多数出土し、これらのほかに窯壁片、焼土塊、また、後代の瓶子、瓦器の細片が出土している。

須恵器蓋坏の中には、拓本に示すような内面に同心円紋スタンプ痕が遺存するものや、外面ヘラ記号を有するものが含まれる。器種には坏蓋（図9-1～9）、坏身（同図-10～31）、横瓶の口縁部（図10-1）、提瓶の口縁部および体部（同図-2・9）、甕（同図-5・8）、高坏（同図-7）、甕の口縁部や口縁部から体部にかけての破片（同図-10・11）がみられる。これらの遺物には焼成中のひび割れ、焼け歪みの激しいものが多く、時期的には田辺編年<sup>20</sup>のTK10型式の範疇におさまるものと考えられる。瓦器の時期については小片のため明らかにできないが、南北朝期に位置付けられよう。

溝A-41（図11-2・3） 近世の伊万里焼染付碗、古墳時代後期の須恵器が出土している。2は内面見込み部に蛇ノ目の釉ハギが認められ、疊付には離れ砂が溶着しており、時期は17世紀中頃から後半にかけてのものと考えられる。3は蓋でTK10型式に属するものであろう。

溝A-43（図11-5～20） 古墳時代後期の須恵器、土師器から近世の土師質土器、磁器が出土した。須恵器の器種には坏蓋（5～8）、坏身（10）、高坏（9）、甕（11～13）が出土し、TK10型式を中心とし、一部、MT15型式までの時期に遡るものも含まれよう。15は土師器の甕で須恵器の示す時期とはほぼ同時期と考えられる。16から18は瓦器の埃で内面に輪縁状の暗文が施され、さらに16の見込みには螺旋状の暗文が確認でき、時期は、尾上編年<sup>21</sup>のIII-1期に位置付けられよう。これら以外にも、19の土師質土器小皿、14の湊焼炮烙の破片、20の伊万里焼の猪口の高台部破片が出土しており、炮烙は17世紀の初め頃、猪口は18世紀に属するものと考えられる。

溝A-46（図11-21～27） 近世の陶磁器が出土している。磁器には伊万里焼碗・皿（23・27）、波佐見焼碗（21・22、25・26）がみられ、陶器には堺插鉢口縁部（24）が出土している。波佐見焼碗は、外面に梅花紋や草花紋を施し、内面見込みには蛇ノ目の釉ハギが施されるくらわんか手と呼ばれるもの一群に属する。これらの遺物は18世紀代に属するものであると考えられる。

溝A-47（図11-28） 18世紀の波佐見焼くらわんか手碗が出土している。

溝A-48（図11-4） 古墳時代後期の須恵器の壺口縁部が出土している。

溝B-01（図12-19-22） 近世から近代にかけての遺物が出土した。磁器には鉄釉と呉須で紋様を表す伊万里焼系湯飲み茶碗（19）、京焼系の灯明皿（20）がある。このほか、湊焼火鉢高台部破片（21）、丸瓦片（22）が出土している。これらの遺物は18世紀代を中心とするものであるが、19に関しては19世紀後半にまで下がる時期のものであろう。

溝B-02（図12-23） 時期不明の施釉陶器口縁部の破片（23）が出土している。

溝B-03（図12-24～27） 近世に属する遺物が出土した。磁器には京焼系の鍋あるいは行平の口縁部破片（24）、伊万里焼では青磁染付碗高台部（25）、染付碗口縁部（27）がみられ、25は内面の見込みに

五弁花紋を押捺し、外面に青磁釉を施す。陶器では唐津三島手の皿（26）が出土し、唐草紋と剣頭紋風の紋様を押捺した後、白泥を嵌入して紋様を表出する。これらの遺物の時期は、24が18世紀代、25が18世紀中頃、26が17世紀前半、27が17世紀後半から終わりにかけてのものと考えられる。

溝A-101（図12-16～18） 古墳時代後期の須恵器の坏蓋（16）、尾上編年III-1・2期頃の瓦器塊（17・18）が出土している。

溝B-201（図12-10～15） 古墳時代後期から奈良時代にかけての須恵器、中世の瓦器（10）、土師質の皿（11）、平瓦（15）が出土した。古墳時代後期の須恵器には趙（12）、臺（14）があり、時期はTK10型式頃のものであろう。奈良時代の須恵器には壺の胴部破片（13）がある。土師質皿は底部に静止系切痕が観察され、瓦器塊は高台が矮小化したもので尾上編年のIII-3期に位置付けられるものである。また、平瓦の凸面には離れ砂が観察でき、おむね14世紀代に属するものであろう。

溝B-202（図12-1～9） 古墳時代後期の須恵器が出土しているが、溝内堆積土の状況や出土遺物の内容に関しては溝A-39と共に通する。須恵器の時期はMT15型式からTK10型式を中心とするもので、器種には坏蓋（1）、坏身（2～5）、壺（6・7）、甕（8・9）などがある。

土坑A-02（図13-9） 波佐見焼くらわんか手碗が出土している。外面にはコンニャク印判による紋様が施されている。

土坑B-01（図13-8） 伊万里焼碗が出土した。外面には鶴と雲の絵画が描かれ、見込みにも紋様が描かれる。時期は19世紀に属すると考えられる。

落込A-01（図13-1～7） 古墳時代後期の須恵器壺口縁部（5）、中世の瓦器塊（2～4）、土師質土器皿（6・7）、伊万里焼染付碗高台部（1）が出土した。瓦器は高台が矮小化し、内面の暗文もほとんど退化したもので、尾上編年のIV-1期前後に属するものと考えられる。1は内面見込みに蛇ノ目の釉ハギが行われ、外側に離れ砂の使用が認められる。外側面の砂が溶着した部分には焼成後、簡単な研磨が行われている。時期的には17世紀後半から18世紀前半に属するものと考えられる。

井戸A-02（図13-15・16） 産地不明の播鉢口縁部（15）と、伊万里焼青磁碗（16）が出土した。碗は内外面に青磁釉を施したもので、内面見込みは蛇ノ目の釉ハギが行われる。

井戸A-03（図13-19～21） 伊万里焼染付碗（19）、波佐見焼染付碗・皿（20・21）が出土している。19は見込みに五弁花紋が押捺され、その周囲には蛇ノ目の釉ハギがみられるもので、18世紀代の製品と考えられる。20・21はそれぞれくらわんか手と呼ばれる製品で、18世紀代の製品であろう。

井戸A-05（図13-24～26） 産地不明の施釉陶器（24）、伊万里焼染付碗（25）、堀播鉢（26）が出土している。25は外面に僅かながら一重の網目手紋が観察でき、17世紀後半から18世紀前半のものである。また、26には18世紀代の年代が与えられよう。

井戸B-01（図13-10～14） 産地不明の炻器（10）、伊万里焼染付碗（11・12）、井戸杵瓦（13・14）が出土している。11は井戸掘方より出土したもので、外面に露をたたえた草葉を描いている。時期的には17世紀末から18世紀前半にかけてのものと思われる。12は見込みに紋様を描いた碗で、19世紀にまで下がるものであろう。13・14は井戸杵に使用された瓦で、凸面に楔状の刻みが加えられているが、その形状に並列するものと綾衫状となるものの二者があることを知ることができる。

井戸B-02（図13-17） 基筈底の伊万里焼底部破片が出土しているが、器種は不明である。時期的には18世紀に属するものであろう。

井戸B-03（図13-18） 京焼系の皿が出土している。見込みには山水紋が描かれている。外面高台内

側には印判により『森』と押捺されている。時期は17世紀後半から18世紀と考えられる。

井戸B-04(図13-22・23) 伊万里焼猪口(22)と波佐見焼染付碗(23)が出土している。23の内面には蛇ノ目の輪ハギが観察される。これらはともに18世紀代のものであろう。

サヌカイト集積遺構B-01(カラー図版1下・図版10下) 各種破片が出土しており、石質および原石面が確認できる剝片の観察から、3個体程度の母石から得られた剝片を取り纏めているものと考えられる。接合作業を行ったが、合致する資料は得られず、また、周辺の土壤を水洗したにもかかわらず微細な剝片も検出することはできなかった。以上の状況から、この場所で剝片採取作業が行われた様相はうかがえず、剝片の状態で他の場所よりこの地へ持ち込まれたものと判断されよう。

第一面出土石器(写真図版10-1・3) 近世までの遺構が検出された同一面で若干の石器が出土した。1は長さ1.4cm、幅1.4cm、重さ0.34gを測るサヌカイト製凹基無茎式の石鏟で、表面の風化が激しい。形態や表面の状態から繩文時代でも古い時期に属するものであろう。3はサヌカイト製凸基有茎式の石鏟で、長さ4.5cm、幅2.3cmを測る。形態から弥生時代中期のものであろう。

盛土(図14~図18) ピニール袋、コンクリート塊などと共に旧石器(写真図版10-2)、古墳時代後期の大量の須恵器(図14~17)、土師器(図16-3)、埴輪(図18)、近世の遺物(図15-21・22)が出土した。

旧石器には、図版10-2の国府型ナイフ形石器があり、現状での長さ5.4cm、幅1.8cm、厚さ1.0cm、重さ11.4gを測る。近世の遺物には21の管状土錘、22の扇子を持った女性を表現したとおぼしき土人形が出土している。古墳時代の須恵器には高坏蓋(図14-1)、坏身(図14-19~36)、坏蓋(図14-2~18)、提瓶および横瓶の口縁部(図15-1~8)、短頸壺(図15-11・12・19)、短頸壺蓋(図15-9、図16-13・14)、甌(図15-13~18)、すり鉢(図15-20)、高坏(図15-23~33)、甌(図16-1・2、4~9、11・12、15~18、図17)、壺(図16-10)、器台(図16-19)が出土しており、図15-34~37には重ね焼の状況を示す遺物を図化した。なお、高坏脚部とした図15-31に関しては、台付長頸壺のそれとなる可能性も捨てきれない。これらの遺物の中でも特に注目されるものに、図15-13の甌がある。体部を二重とし、その中に須恵質の土玉を1点入れ込んでおり、いわゆる鉢付き土器と呼ばれるものである。この時期の鉢付甌としては、福井県遠敷郡上中町丸山塚古墳出土遺物<sup>3</sup>の中に1点が知られているなど非常に類例の少ない資料であり、特筆に値すると言える。これらの須恵器の時期については、TK10型式の範疇に納まるものであろう。土師器には図16-3に示す甌の口縁部が1点出土しており、これは須恵器の示す年代とほぼ同時期のものと考えられる。埴輪には、図18に示すような円筒埴輪や、馬・人物などの各種形象埴輪が出土している。円筒埴輪には鰐を付する破片も存在し、また、形象埴輪には1のような革紐とそれを結束する辻金具を表現したと考えられるもの、2のように輪鉾を表現したもの、5のように障泥の周囲の縫い取りを表現したと考えられるものなど飾馬の各部位が出土している。人物埴輪には16のような着衣の表現の見られない人物の左腕が出土しているほか、どのような埴輪になるのか判断のつきにくい破片が出土し、この中には図に示すような線刻を有するものも存在する。これら一群の埴輪や須恵器は、近接する日置荘西町窯跡群と共通した要素を持つことで注目に値する。

#### 注

1) 田辺昭三 1981『須恵器大成』角川書店 以下、須恵器形式はこれによる。

2) 尾上 実 1983「南河内の瓦器挽」『藤澤一夫先生古稀記念 古文化論叢』藤澤一夫先生古稀記念論集刊行会 以下、瓦器編年はこれによる。

3) 福井県 1986『福井県史』資料編13 考古

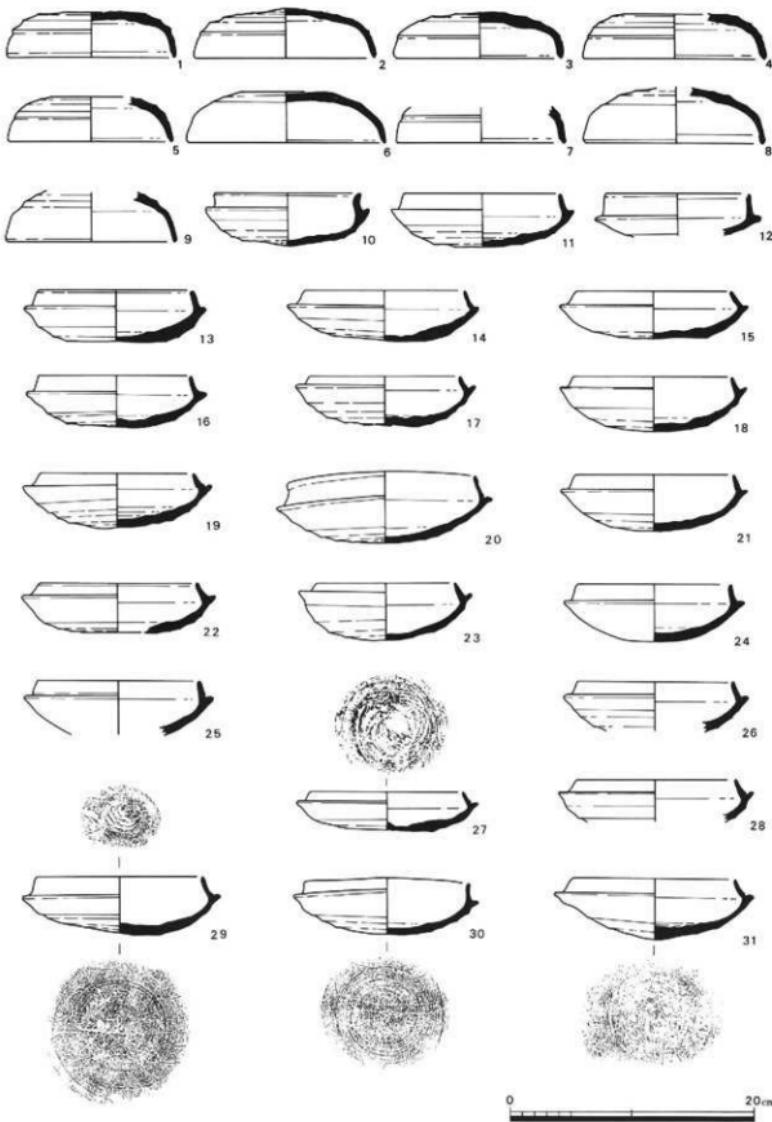


図9 溝A-39出土遺物(1)

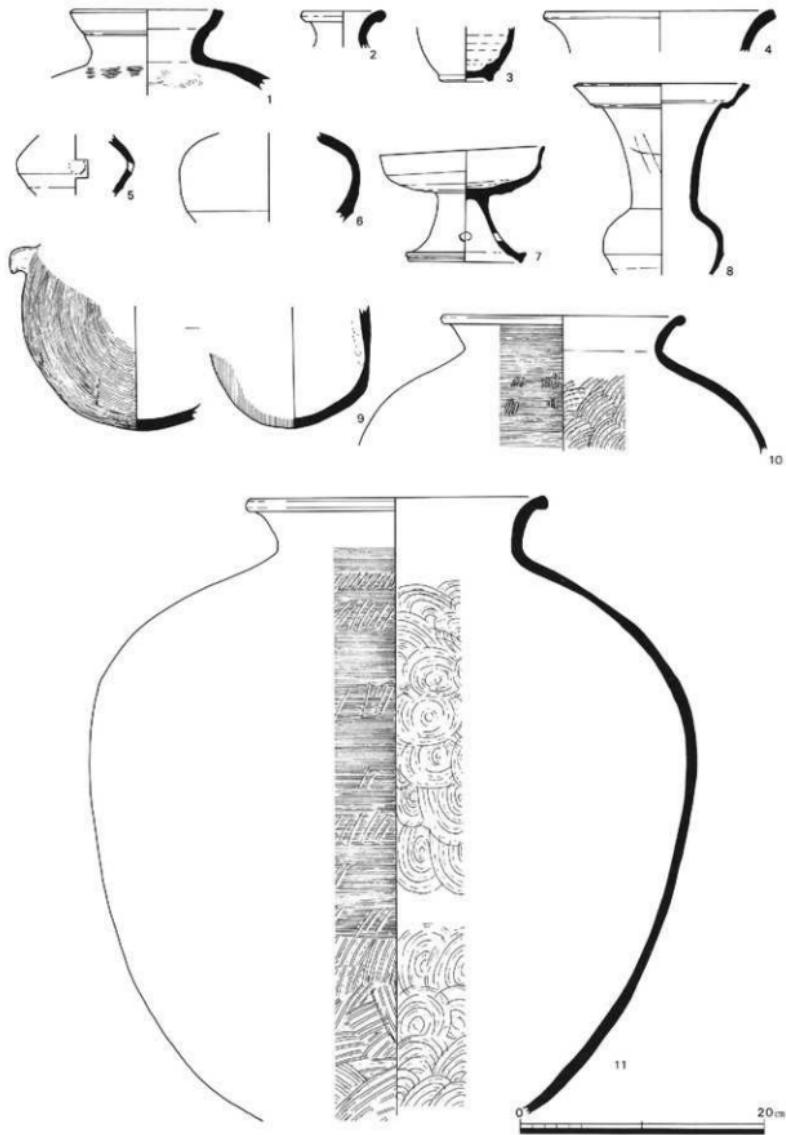


图10 漕A-39出土遗物（2）

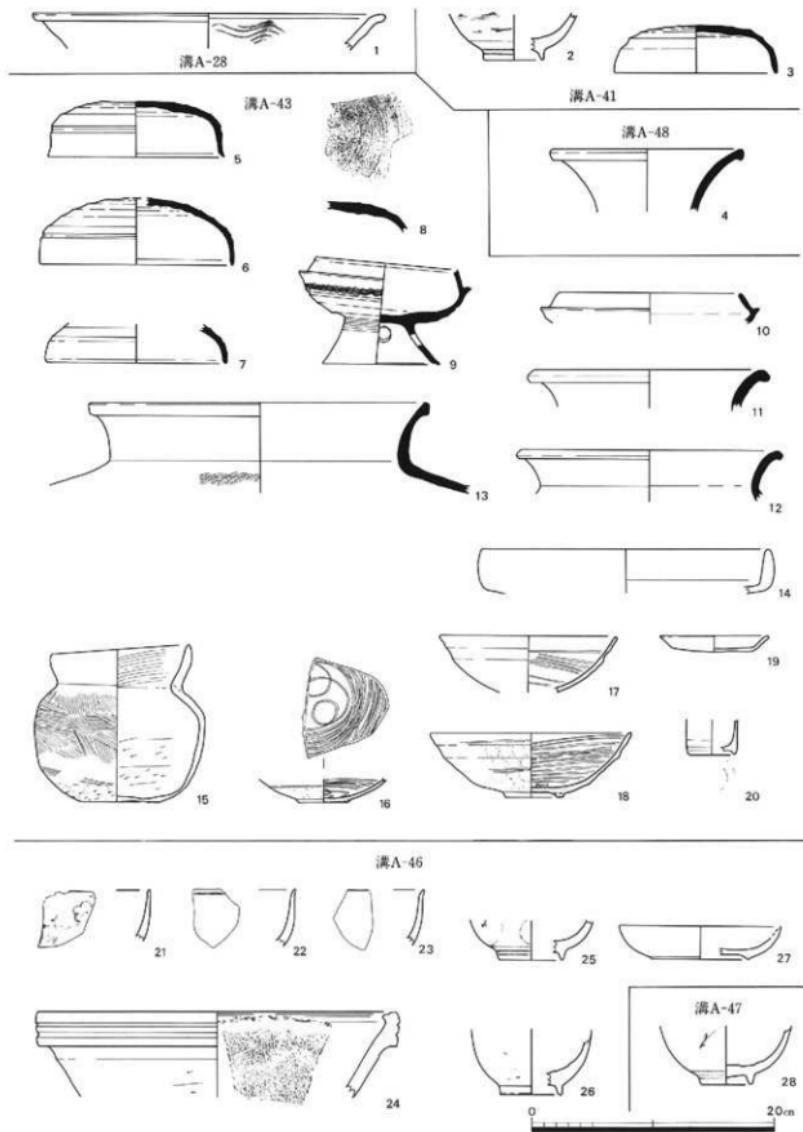


图11 满出土遗物 (1)

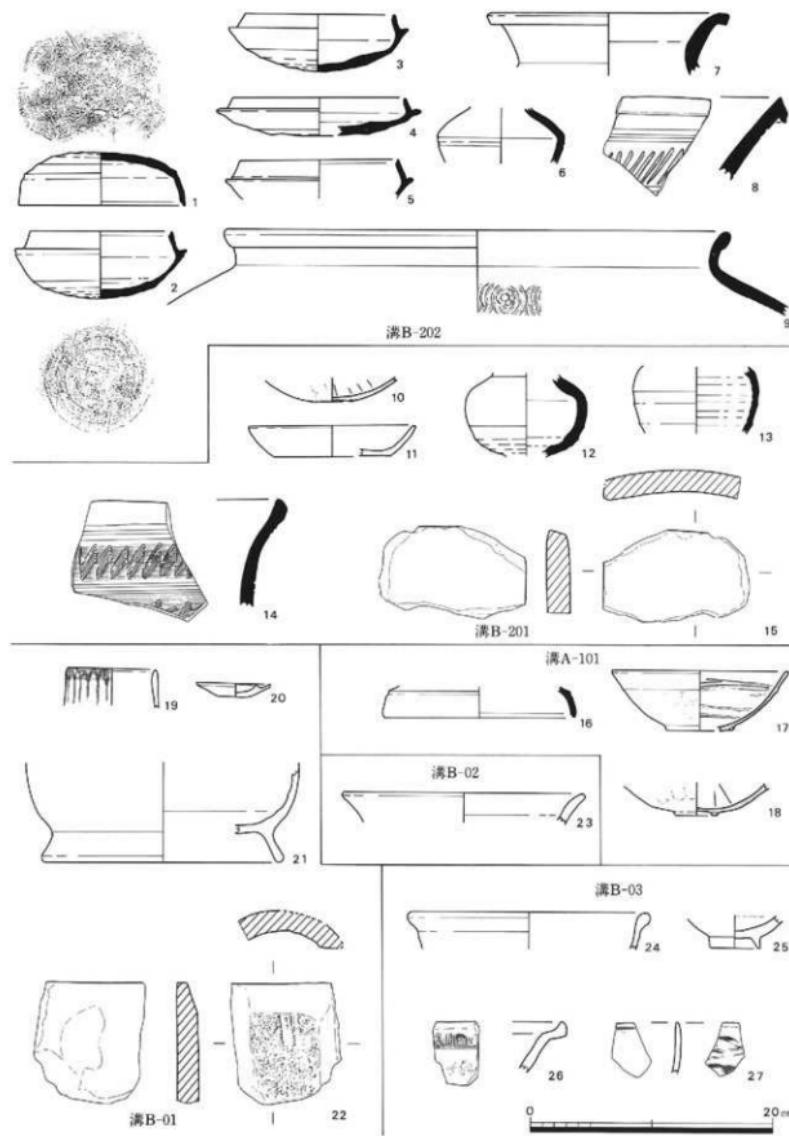


図12 溝出土遺物（2）

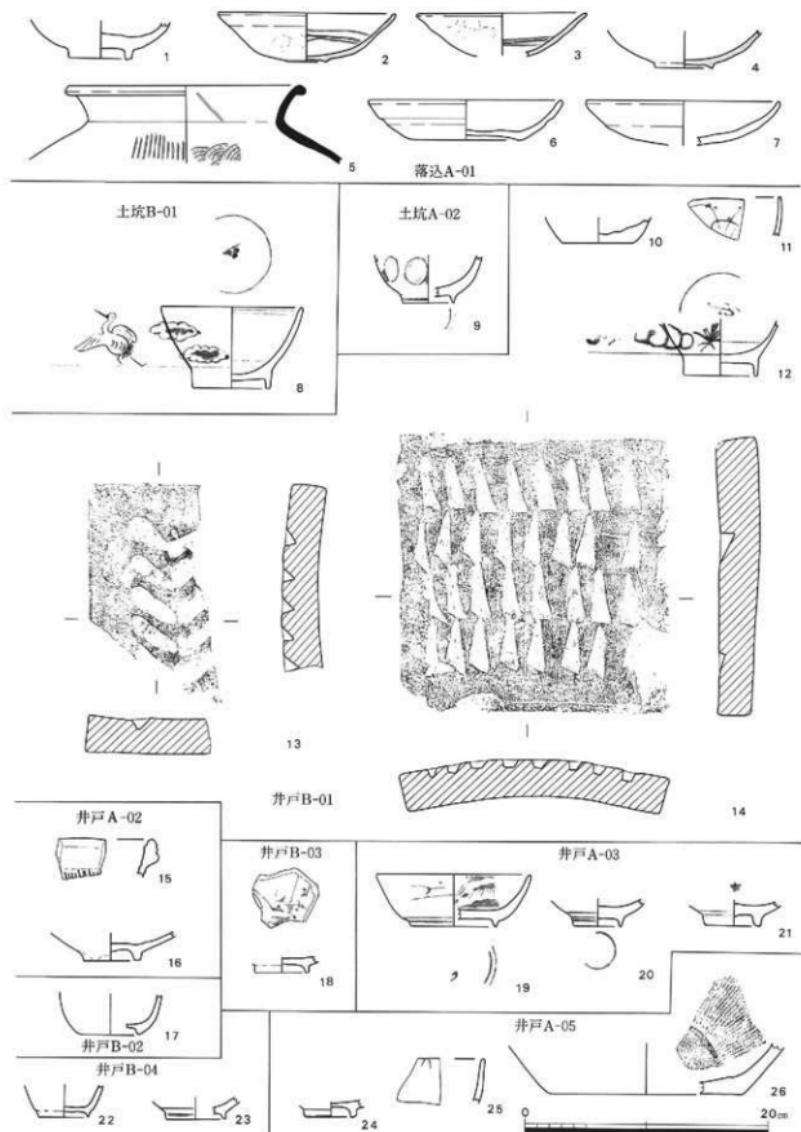


図13 落込・土坑・井戸出土遺物

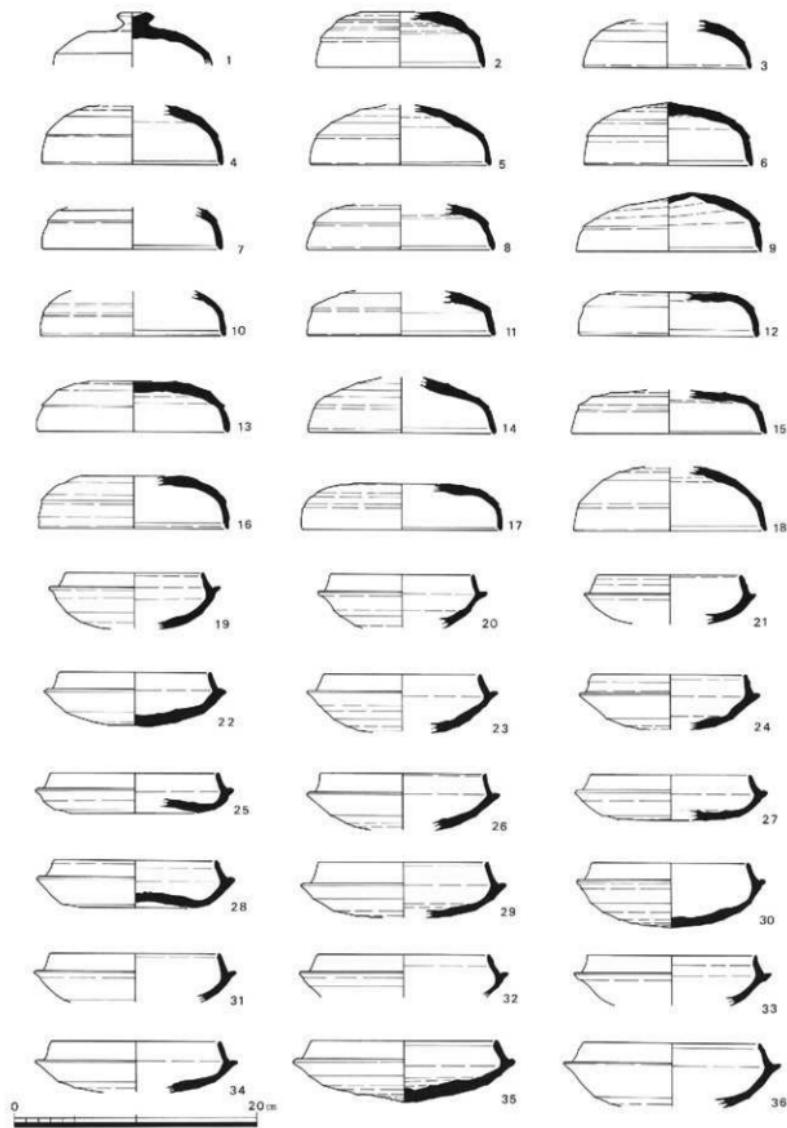


図14 盛土内出土遺物（1） 須恵器

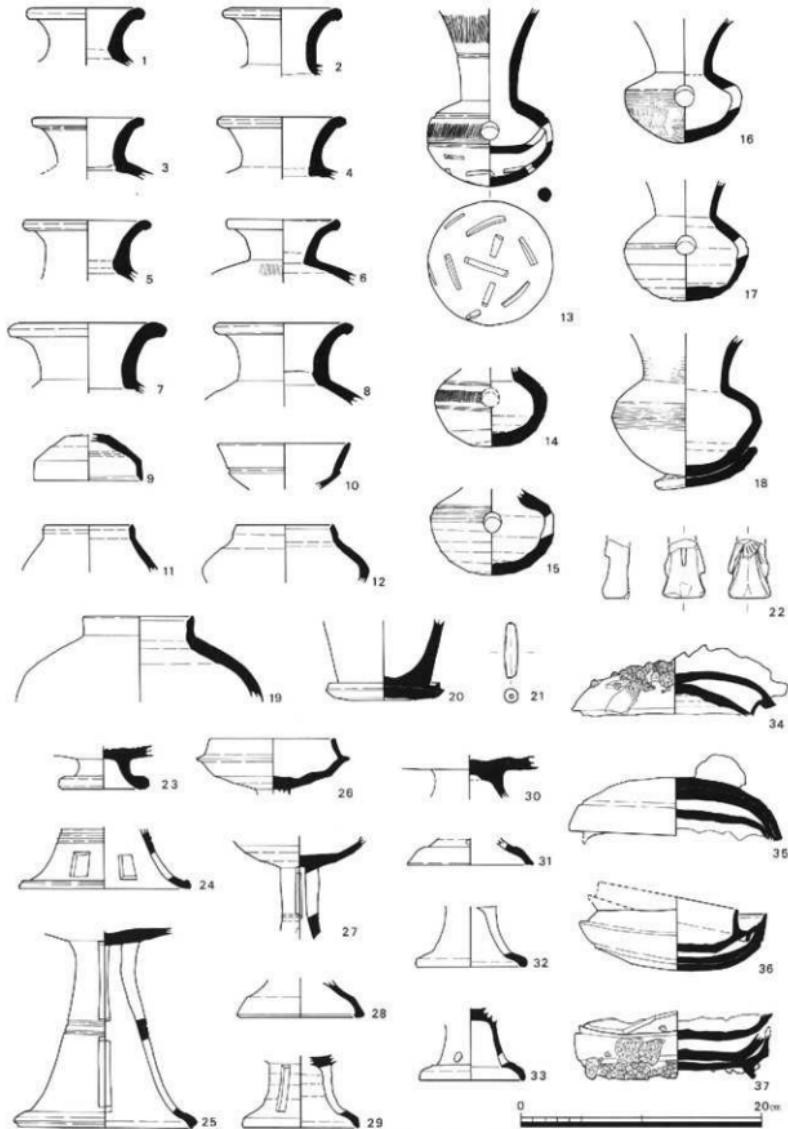


図15 盛土内出土遺物（2） 須恵器等

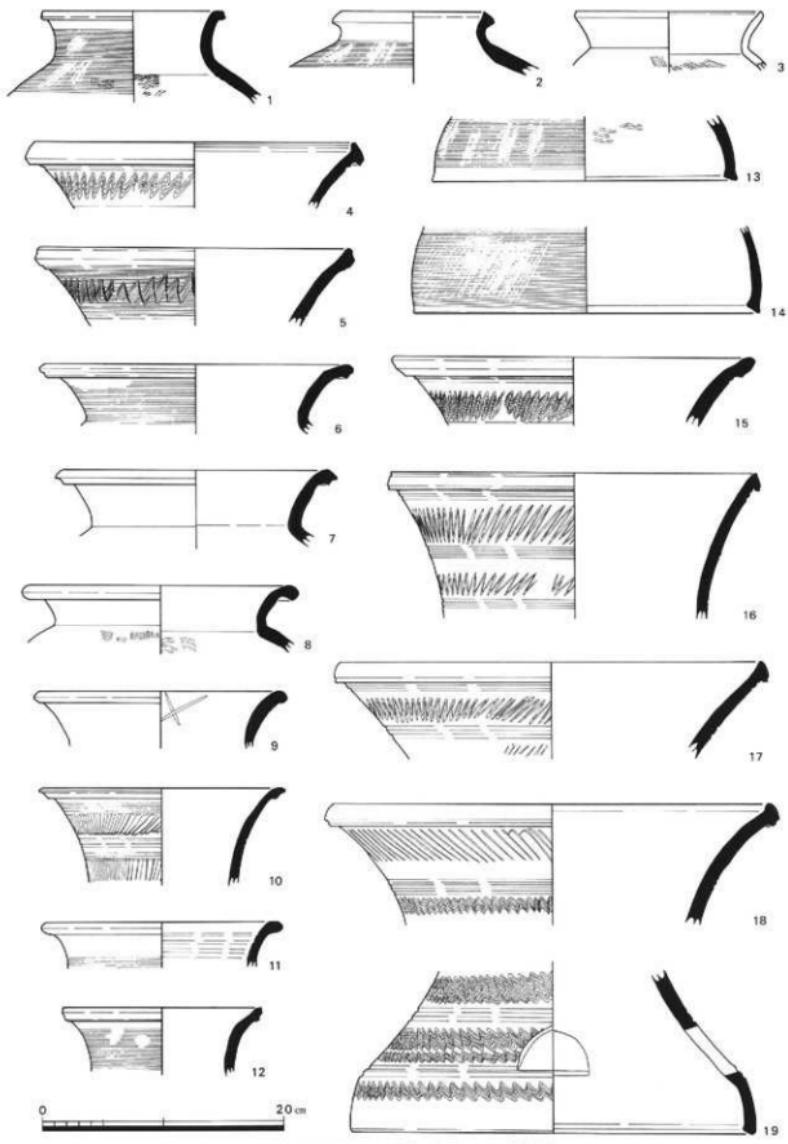


図16 盛土内出土遺物（3）須恵器等

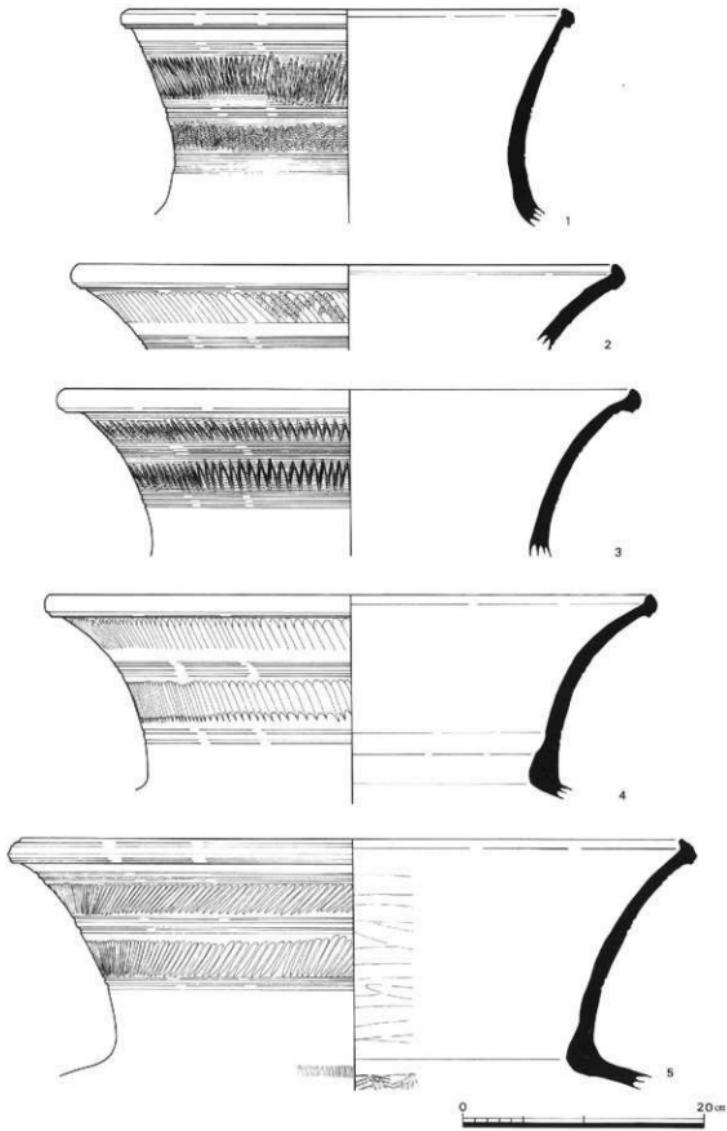


図17 盛土内出土遺物（4）須恵器



図18 盛土内出土遺物（5） 塚輪

## 第4節 自然科学的分析

須恵器及び埴輪について、サンプルを任意に抽出し、X線回折と化学分析を行った。本書では分析表のみ掲載するが、分析方法等については1995年3月31日刊行予定の「日置莊遺跡」を参照されたい。

表1 墓輪・須恵器胎土性状表（X線回折実験結果）

資料番号	遺物種類	タイプ 分類	組成分類			粘土鉱物及び造岩鉱物							
			Mo-Mi-Hb	Mo-Ch, Mi-Hb	Mont	Mica	Hb	Qt	Pi	Crist	Mullite	Pyrite	K-fels
福田-1	円筒埴輪	F	14	20			4491	179	80		55		282
福田-2	円筒埴輪	D	10	17	221	132	3335	127					
福田-3	円筒埴輪	F	14	20			4607	126					251
福田-4	円筒埴輪	C	8	20		129	3441	200					237
福田-5	円筒埴輪	E	11	20	212		3220	135					176
福田-6	円筒埴輪	F	14	20			4512	109	78		81		
福田-7	円筒埴輪	C	8	20		123	4443	125					210
福田-8	円筒埴輪	F	14	20			3149	91					137
福田-9	円筒埴輪	C	8	20		145	3320	119					253
福田-10	円筒埴輪	C	8	20		134	3838	161					235
福田-11	円筒埴輪	C	8	20		104	2725	203					280
福田-12	円筒埴輪	C	8	20		90	3996	107					223
福田-13	円筒埴輪	B	7	20		115	96	4766	241				295
福田-14	円筒埴輪	F	14	20			4926	133					248
福田-15	円筒埴輪	C	8	20		54	4371	134					
福田-16	高輪	F	14	20			1192	103	176	187	177		
福田-17	蓋	F	14	20			2596	71	146	81	78		125
福田-18	腹	F	14	20			1285	102	178	268	223		
福田-19	腰	F	14	20			3141	53	94	59			109
福田-20	腹頸	F	14	20			2254	73	149	172	139		
福田-21	坏蓋	F	14	20			1882	103	139	115	111		
福田-22	坏蓋	F	14	20			1934	75	232	213	200		
福田-23	坏身	F	14	20			2804	105	122	142	127		
福田-24	腰	F	14	20			1107	96	179	293	233		112
福田-25	坏身	F	14	20			3022	155					
福田-26	坏身	F	14	20			2834	248					
福田-27	腰	F	14	20			1853	81	317	250	234		
福田-28	腰	F	14	20			832	112	234	273	233		
福田-29	坏身	A	5	20		65	1881	105	464	253	199		
福田-30	坏蓋	F	14	20			2117	55	655	137	115		
福田-31	腹	F	14	20			1393	95	218	490	178		
福田-32	坏身	A	5	20		63	1410	89	444	182	171		
福田-33	腰	F	14	20			1235	82	350	289	229		
福田-34	坏身	F	14	20			1003	86	238	324	266		
福田-35	坏身	F	14	20			1692	79	187	224	222		
福田-36	蓋	F	14	20			1319	98	385	206	198		
福田-37	坏蓋	F	14	20			1757	88	211	284	183		
福田-38	腰	F	14	20			1411	93	227	288	235		
福田-39	坏身	F	14	20			1059	107	315	223	189		
福田-40	坏蓋	F	14	20			2183	86	217	131	110		
福田-41	短筒瓶	F	14	20			1287	96	279	208	171		
福田-42	坏身	F	14	20			1605	78	152	151	136		
福田-43	器台	F	14	20			2607	105	211	127	112		105
福田-44	短筒	F	14	20			1296	81	175	223	183		
福田-45	腰	F	14	20			1916	81	160	178	159		

表 2 塗輪・須恵器胎土化学分析表

資料番号	遺物種類	Na <sub>2</sub> O	MgO	Al <sub>2</sub> O <sub>3</sub>	SiO <sub>2</sub>	K <sub>2</sub> O	CaO	TiO <sub>2</sub>	MnO	Fe <sub>2</sub> O <sub>3</sub>	NiO	Total
福田-1	円筒埴輪	0.98	0.35	28.39	60.56	2.27	0.16	0.95	0.00	6.20	0.14	100.00
福田-2	円筒埴輪	0.24	0.00	31.44	56.33	1.45	0.23	0.84	0.00	9.24	0.23	100.00
福田-3	円筒埴輪	0.12	0.00	28.88	57.89	2.27	0.27	0.92	0.00	9.65	0.00	100.00
福田-4	円筒埴輪	0.25	0.00	32.91	56.38	1.63	0.31	0.82	0.00	7.71	0.00	100.01
福田-5	円筒埴輪	0.42	0.13	30.15	55.39	1.61	0.37	0.82	0.12	10.61	0.39	100.01
福田-6	円筒埴輪	0.45	0.59	28.44	58.64	1.65	0.26	0.69	0.00	9.30	0.00	100.02
福田-7	円筒埴輪	0.20	0.15	25.73	63.62	1.39	0.23	1.00	0.00	7.67	0.00	99.99
福田-8	円筒埴輪	0.23	0.53	29.50	56.84	1.98	0.18	1.19	0.00	9.37	0.18	100.00
福田-9	円筒埴輪	0.21	0.12	28.19	56.01	1.58	0.22	0.87	0.00	12.74	0.08	100.02
福田-10	円筒埴輪	0.32	0.00	26.42	58.47	1.52	0.17	1.00	0.00	12.03	0.08	100.01
福田-11	円筒埴輪	1.39	0.05	30.80	57.39	2.22	0.20	0.66	0.28	6.77	0.23	99.99
福田-12	円筒埴輪	0.07	0.10	34.81	53.12	1.77	0.22	1.21	0.00	8.65	0.06	100.01
福田-13	円筒埴輪	0.42	0.07	29.20	56.75	2.75	0.23	0.94	0.00	9.30	0.33	99.99
福田-14	円筒埴輪	0.84	0.32	27.18	59.03	2.19	0.18	0.83	0.00	9.43	0.00	100.00
福田-15	円筒埴輪	0.60	0.45	25.24	60.89	2.05	0.16	1.00	0.00	9.13	0.47	99.99
福田-16	高坏	0.93	0.47	22.39	65.24	3.06	0.32	0.76	0.15	6.68	0.00	100.00
福田-17	壺	0.40	0.53	24.09	63.53	2.46	0.23	1.95	0.05	6.64	0.13	100.01
福田-18	瓢	1.29	0.44	22.45	67.50	2.69	0.47	0.35	0.00	4.81	0.00	100.00
福田-19	甕	0.05	0.57	27.38	60.07	2.36	0.16	0.93	0.00	8.48	0.00	100.00
福田-20	角鏡類	0.73	0.57	24.40	63.61	2.90	0.25	0.99	0.13	6.23	0.19	100.00
福田-21	坏蓋	1.37	0.48	23.94	63.13	2.83	0.30	0.78	0.38	6.76	0.02	99.99
福田-22	坏蓋	0.61	0.53	25.67	65.08	2.32	0.11	0.88	0.11	4.57	0.13	100.01
福田-23	坏身	1.37	0.50	25.59	59.75	2.31	0.31	1.07	0.08	8.98	0.05	100.01
福田-24	甕	1.26	0.63	24.32	62.82	2.68	0.24	0.82	0.00	6.93	0.28	99.98
福田-25	坏身	0.87	0.60	25.42	60.08	2.50	0.33	1.02	0.00	9.20	0.00	100.02
福田-26	坏身	0.91	0.82	25.50	59.59	2.49	0.28	0.90	0.00	9.22	0.29	100.00
福田-27	甕	0.57	0.31	25.82	63.84	2.93	0.34	0.76	0.00	5.17	0.27	100.01
福田-28	甕	1.01	0.59	23.35	65.97	2.57	0.36	0.62	0.05	5.46	0.00	99.98
福田-29	坏身	0.21	0.38	22.22	67.37	2.13	0.03	0.63	0.07	6.96	0.00	100.00
福田-30	坏蓋	0.26	0.45	23.67	63.73	2.20	0.15	1.15	0.17	8.04	0.18	100.00
福田-31	瓢	0.67	0.30	21.91	68.39	2.70	0.20	0.70	0.10	5.04	0.00	100.01
福田-32	坏身	0.15	0.52	24.79	63.59	2.45	0.21	1.11	0.08	7.05	0.04	99.99
福田-33	甕	0.74	0.96	23.01	66.25	2.67	0.35	0.63	0.00	5.39	0.00	100.00
福田-34	坏身	0.67	0.64	23.63	66.10	2.23	0.16	0.94	0.10	5.53	0.00	100.00
福田-35	坏身	0.98	0.52	18.94	71.47	2.61	0.14	0.80	0.00	4.53	0.00	99.99
福田-36	壺	0.51	0.64	22.56	67.28	2.17	0.15	0.84	0.36	5.36	0.13	100.00
福田-37	坏蓋	0.96	0.54	25.38	63.51	2.49	0.29	0.94	0.11	5.69	0.08	99.99
福田-38	甕	0.57	0.66	21.33	67.99	2.51	0.40	0.69	0.00	5.52	0.24	100.01
福田-39	坏身	0.98	0.43	22.54	66.53	3.18	0.16	0.69	0.13	5.11	0.24	100.01
福田-40	坏身	1.36	0.51	24.03	63.19	3.45	0.24	0.86	0.13	6.10	0.13	100.00
福田-41	短颈瓶	1.19	0.66	22.42	64.28	2.92	0.45	0.87	0.43	6.48	0.30	100.00
福田-42	坏身	1.70	0.57	22.46	62.96	3.22	0.51	0.65	0.00	7.94	0.00	100.01
福田-43	器台	0.39	0.48	25.17	63.69	2.30	0.16	0.66	0.18	6.98	0.00	100.01
福田-44	瓶類	1.51	0.36	22.89	64.37	2.99	0.28	0.64	0.31	6.63	0.00	99.98
福田-45	甕	1.36	0.45	23.85	64.34	3.13	0.34	0.76	0.00	5.72	0.05	100.00

## 第4章 まとめ

福田遺跡は、泉州地区で最大の面積を有する高位段丘面上に立地する。検出された最も古い遺構は、弥生時代以前としか言えないサヌカイト集積遺構である。剝片でのみ構成されて碎片を含まないため、石器の素材として持ち運びされていた可能性が高い。同様の遺構は、八尾市久宝寺遺跡の縄文晩期～弥生前期包含層で検出されたサヌカイト集積遺構<sup>1)</sup>等、近年検出例が増えている。

1981年度末の福田遺跡の第1次調査（試掘）以降に調査地に運び込まれた盛土から多量に出土した須恵器や埴輪は、6世紀後半の時期のものである。須恵器については、溶着資料や窯壁片を含む所から須恵器窯もしくはその灰原が破壊された事は間違いない。破壊された場所については、周辺での聞き取り調査の結果、調査地の約300m西側の段丘崖の可能性が高いことが判明している。この一帯は、陶邑古窯址群の中の陶器山支群の北縁部にあり、まだ確認された須恵器窯の数は少ない。しかし、第2章第2節の「歴史的環境」の中でも述べたように、それほど多くはない段丘崖沿いの発掘調査でかなりの頻度で須恵器窯やその灰原が検出されており、まだまだ多くの須恵器窯が存在しているものと思われる。

埴輪についても、古墳を破壊したために混入した可能性も否定できないが、盛土内では須恵器と混在しており、同じ一連の掘削で混入したと考える方が自然である。掘削場所が須恵器窯の存在する段丘崖かその裾部とすると、同じような立地をする埴輪窯かその灰原を供給源とする蓋然性が高いと言える。出土した埴輪が日置荘西町埴輪窯出土のものと類似しており、日置荘西町窯跡群と同じように須恵器窯と埴輪窯が同時期に隣接して併存していたのである。その意味では、須恵器窯と同様、この一帯にも未発見の埴輪窯がまだまだ存在する可能性がある。福田遺跡北西約2kmからは巨大古墳の群立する百舌鳥古墳群が広がっており、そこに樹立された膨大な埴輪の焼成場所が確認されていない現状からして、この地域での調査の進展が期待される。

中世では、自然流路の中に14世紀代の瓦器とともに6世紀中頃から後半にかけての多数の須恵器や窯壁片が出土している。この事から、この自然流路の上流の開析谷斜面に須恵器窯の存在する可能性が高いと言える。なお、開析谷内に常に流路が存在していたにも関わらず、6世紀代の須恵器窯の遺物が中世になって初めて下流に押し出された理由としては、変遷する流路が中世段階で灰原を削除するようになったか、近世の新田開発に先立つ何らかの開発行為が上流側で行われた等が考えられる。

福田遺跡の所在する福田は、福田村と呼ばれた正保3（1646）年に成立した新田である。この地域の大野原とも呼ばれ開発不能と言われた水利の悪い高位段丘面は、大阪等の都市を市場とする商品作物を畠作することで開発が可能となった。大野原は17世紀末から18世紀初頭までにはほぼ開発し尽くされるが、福田村はその中でも初期の開発となる。

今回の調査では、斜面を切り盛りしていわゆる段々畠に整形する等の新田開発の状況がよく観察された。水利は、溜池と井戸による2種類の灌漑が併用されるが、調査区内でも数多の井戸が検出されている。また、過湿潤になりやすい開析谷底には疊を詰めた暗渠が埋設されるなど、生産性を上げるために細かな工夫が巡らされている。なお、栽培された作物については、綿・大豆・煙草・大根・蕎麦等であるが、特に煙草は新田煙草として有名であった。

注

1) 「久宝寺北（その1～3）」 1987 大阪府教育委員会・財団法人大阪文化財センター 20～33頁

表3 報告書抄録

ふりがな	ふくだ いき							
書名	福田遺跡							
副書名	近畿自動車道松原すさみ線および府道松原泉大津線建設に伴う発掘調査報告書							
巻次								
シリーズ名								
シリーズ番号								
編著者名	赤木克視・三好孝一							
編集機関	財団法人 大阪文化財センター							
所在地	〒536 大阪府大阪市城東区蒲生2丁目10番地28号 大阪府城東庁舎							
発行年月日	1994年9月30日							
ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 m <sup>2</sup>	調査原因
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号					
ふくだ いき 福田遺跡	木咲か さがれ ふくだ 大阪府堺市堺市福田	27201	無し	34度 31分 40秒	135度 31分 20秒	その1 19861124～ 19870325 その2 19870528～ 19871015	9500	高速道路 大阪府道 建設に伴 う事前調 査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
福田遺跡	田畠	弥生以前 中世 近世以降	サヌカイト集積遺構 自然流路 土坑・落込 溝(用水路) (暗渠) (敷溝) 井戸 土坑(焼土坑含む) 落込	1 3 各1 ≥1 8 多数 15 ≥6 ≥2	サヌカイト剝片 須恵器 土師器 埴輪(形象・円筒) 瓦器 陶磁器	近接地での須恵器・ 埴輪窯の存在を示唆 (現代の盛土内でコ ンテナ約100箱の須 恵器・埴輪出土)	近世の新田開発に伴 う圃場造成を確認	